

健康増進施設建設に伴う

天王平遺跡発掘調査報告

—— 第8次調査 ——

桑名市教育委員会

2010年3月

巻頭カラー



調査区遠景（東から）

刊行のことば

天王平遺跡は、これまでも発掘調査が行われ奈良時代から平安時代の集落跡であることが分かっています。ゆるやかに東へ傾斜する地形は、当時の人にとっても好都合な居住地だったのでしょう。

桑名市の多度地域は、多度大社が鎮座し信仰の中心として栄えていました。また、交通の要衝として人々が行き交う場所でした。天王平遺跡は、そんな多度地域の中でも中心的な遺跡であったと考えられています。遺跡の調査を通じて、古代から続く歴史を明らかにして行きたいと考えております。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたりご協力いただいた地元の皆様をはじめとした関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

桑名市教育委員会

教育長 大橋則久

例 言

- 1 本書は、桑名市多度町小山字天王平に所在する、天王平遺跡第8次調査の発掘調査報告である。
- 2 調査の期間・原因・体制
期間 A区 平成20年 1月16日～平成20年 1月21日
B・C区 平成20年 5月 8日～平成20年 7月12日
D区 平成21年 9月15日～平成21年11月 6日
原因 健康増進施設建設
体制 調査主体 桑名市教育委員会
調査担当 石神教親（桑名市教育委員会文化課）
発掘調査業務・測量業務については、株式会社イビソク三重営業所に委託して実施した。
- 3 調査にかかる費用は、桑名市が負担した。
- 4 出土遺物の整理は持田 透・松田 繁（株式会社イビソク）が担当し、報告書の執筆は石神教親と分担して行った。文責は文末に示した。
- 5 遺物実測図は、3分の1の縮尺に統一したが、それと異なるものについては個々に表記した。また、遺物の名称については、椀・碗・鉢を碗に、坏・杯を杯に統一した。
- 6 本書で使用している記号は以下のとおりである。
SH 掘立柱建物 SD 溝 SB 竪穴住居 SK 土坑
- 7 調査にあたっては、桑名市保健福祉部健康づくり課・小山自治会をはじめ、隣地の地権者の皆様からご協力を得た。
- 8 調査に関する記録類および出土遺物は、桑名市教育委員会で管理・保管している。

本文目次

第1章	位置と環境	
	第1節	地理的環境 1
	第2節	歴史的環境 1
第2章	調査結果について	
	第1節	調査区と層位 5
	第2節	遺構
		A区 5
		B区 7
		C区 16
		D区 17
	第3節	遺物 19
第3章	まとめ 22

図 版 目 次

図 1	周辺遺跡図	2	図 10	風倒木 01・02・12 実測図	13
図 2	調査区位置図 1	3	図 11	風倒木 07・08 実測図	14
図 3	調査区位置図 2	4	図 12	風倒木 09-11、P04-06・14 実測図	15
図 4	A区遺構実測図	6	図 13	C区北壁面実測図	16
図 5	B区・C区調査区全体図	8	図 14	D区全体図・SB02 実測図	17
図 6	B区・C区主要遺構図	9	図 15	D区壁面実測図	18
図 7	B区壁面実測図	10	図 16	出土遺物実測図	20
図 8	SH01 実測図	11	図 17	1次調査区と8次調査区	24
図 9	SK03-06、風倒木 03-06 実測図	12			

表 目 次

表 1	遺物観察表	21
-----	-------	----

写 真 図 版

巻頭カラー 調査区遠景（東から）

図版 1	A区調査前風景（東から） A区遺構検出状況（東から）	図版 6	C区調査前風景（西から） C区完掘状況（西から）
図版 2	A区 SB01（西から） A区 P01（南から）	図版 7	D区西側調査前風景（南から） D区西側完掘状況（南から）
図版 3	B区調査前風景（東から） B区完掘状況（南西から）	図版 8	D区西側調査前風景（西から） D区西側完掘状況（東から）
図版 4	B区 SH01（北から） B区 P06（南から）	図版 9	D区東側完掘状況（西から） D区東側 SB02（北西から）
図版 5	B区 SK03（西から） B区風倒木 09（西から）	図版 10	A区出土遺物 B・D区出土遺物

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

桑名市は、三重県の北端に位置し、岐阜県と愛知県に接する。市域の東側は、木曾・長良・揖斐川の木曾三川の河口部に位置し、濃尾平野の一角を占め、輪中を形成している。市域西側は養老山地の南端となる多度山が標高 403 m の高さで、その他は丘陵がひろがっている。

天王平遺跡のある、小山丘陵は養老山地から源を發する多度川と肱江川に挟まれ、標高は 30 ～ 100 m ほどである。多度山（大山）に対して小山と呼ばれるようになったといわれている。現在では、造成によって多くの部分が宅地などへと変貌をとげている。北側は、多度川によって削られ急傾斜となり、遺跡がある東側は、緩やかに傾斜し東端は段丘崖となっている。丘陵の東側は、多度川右岸が扇状地となっており、その南は沖積低地で、水田がひろがる。

第2節 歴史的環境

小山丘陵周辺は、遺跡が密集する部分であり数多くの遺跡が分布している。丘陵の西側に位置する寺山遺跡からはナイフ形石器が見つかっており、桑名市では珍しい旧石器時代の遺跡である。縄文時代は、天王平遺跡・寺山遺跡など数ヶ所の遺跡で遺物が見つかるだけで、遺構は今のところ確認されていない。

古墳時代の遺跡としては、丘陵南側に大久保古墳群があるが、開墾などにより大半が滅失している。天王平遺跡第7次調査では、古墳時代の竪穴住居2棟が検出されている。

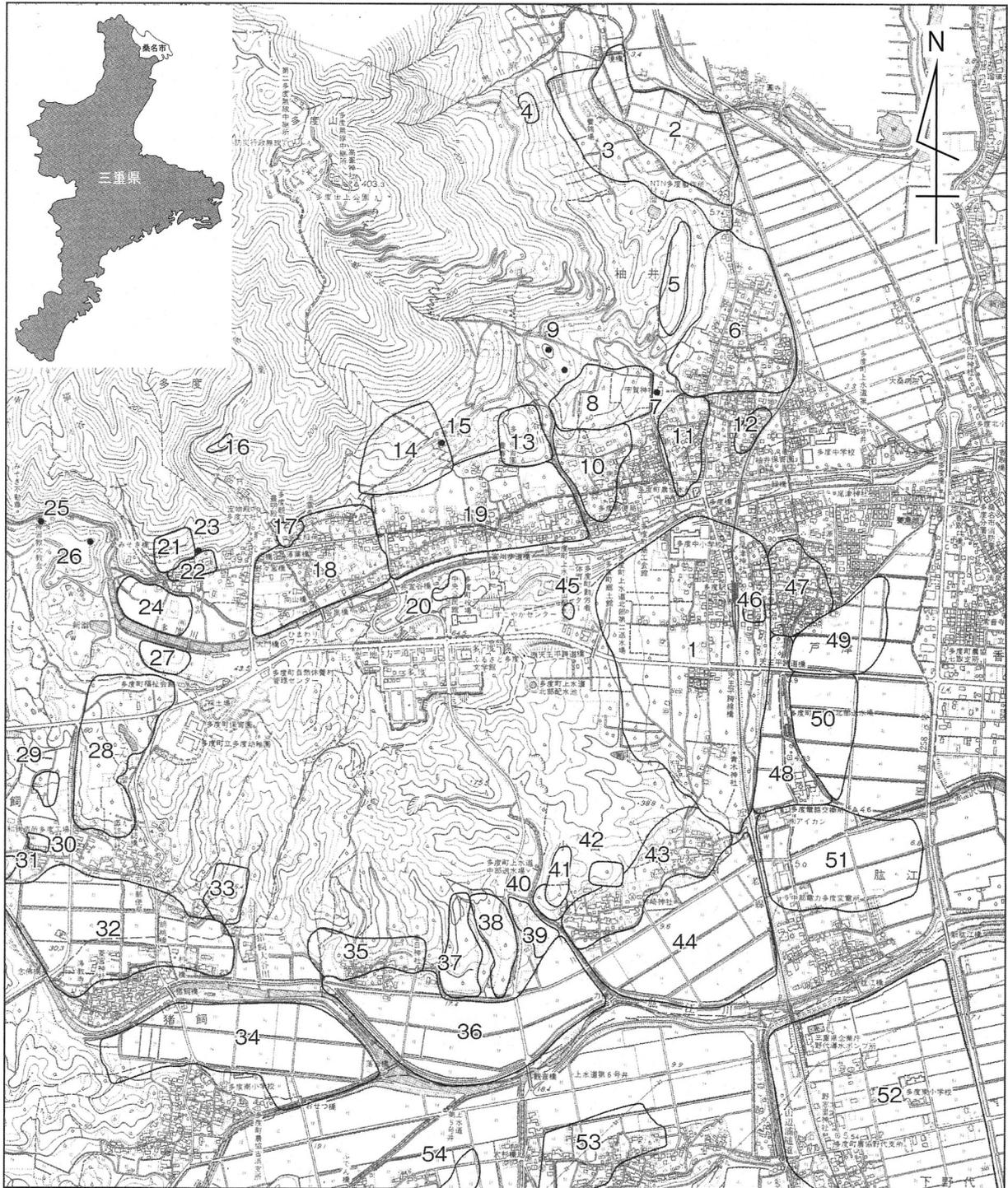
古代の遺跡では、同じ丘陵南側に南小山廃寺がある。戦前から瓦や鴟尾が見つかっており、昭和60年の発掘調査では単弁、素弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦が出土している。天王平遺跡に包摂される位置に、北小山廃寺があり、南小山廃寺と同文の軒丸瓦が出土しているが、遺構はまだ見つからない。

天王平遺跡のこれまでの調査で奈良・平安時代の竪穴住居が多数検出され、第4次調査では10世紀代の古代墓も確認されている。古代墓では、南小山廃寺の東側の丘陵から蔵骨器が出土しており、南小山廃寺にかかわる人物の墓と推定されている。

天王平という地名は壬申の乱の折、天武天皇が訪れたことに由来する伝承が地元には残されている。実際に、この場所に逗留したかはともかくとして、桑名から北上しこの辺りを通過していることは間違いなく、養老山地沿いを通る古代からの街道があったことを物語っている。また、当時の海岸線は、多度と対岸の津島の間であったと考えられ、古代の渡し場であった。時代を経るにしたがい、海岸線が移動して陸地化が進んだ場所は、人々の生活の場となり、中世以降、平野部には香取荘・野代荘・富津御厨などが成立した。そして、小山丘陵の東側には、馬場、藤塚、森下、尾津森遺跡があり、中世陶磁器が多く採集されている。これに比して、天王平遺跡・南小山廃寺などでは12世紀以降の遺構・遺物が少なくなる。

この他、中世の遺跡では多度町内には多くの中世墓群がみられる。その内、小山丘陵北端の多度川に面する部分には祢宜谷中世墓群があり、古瀬戸や常滑焼の蔵骨器が出土している。五輪塔などの石塔もみつまっている。他の中世の遺跡では森下遺跡から室町時代の瓦など出土し、小山城跡・猪飼城跡も丘陵南側に位置している。

(石神教親)

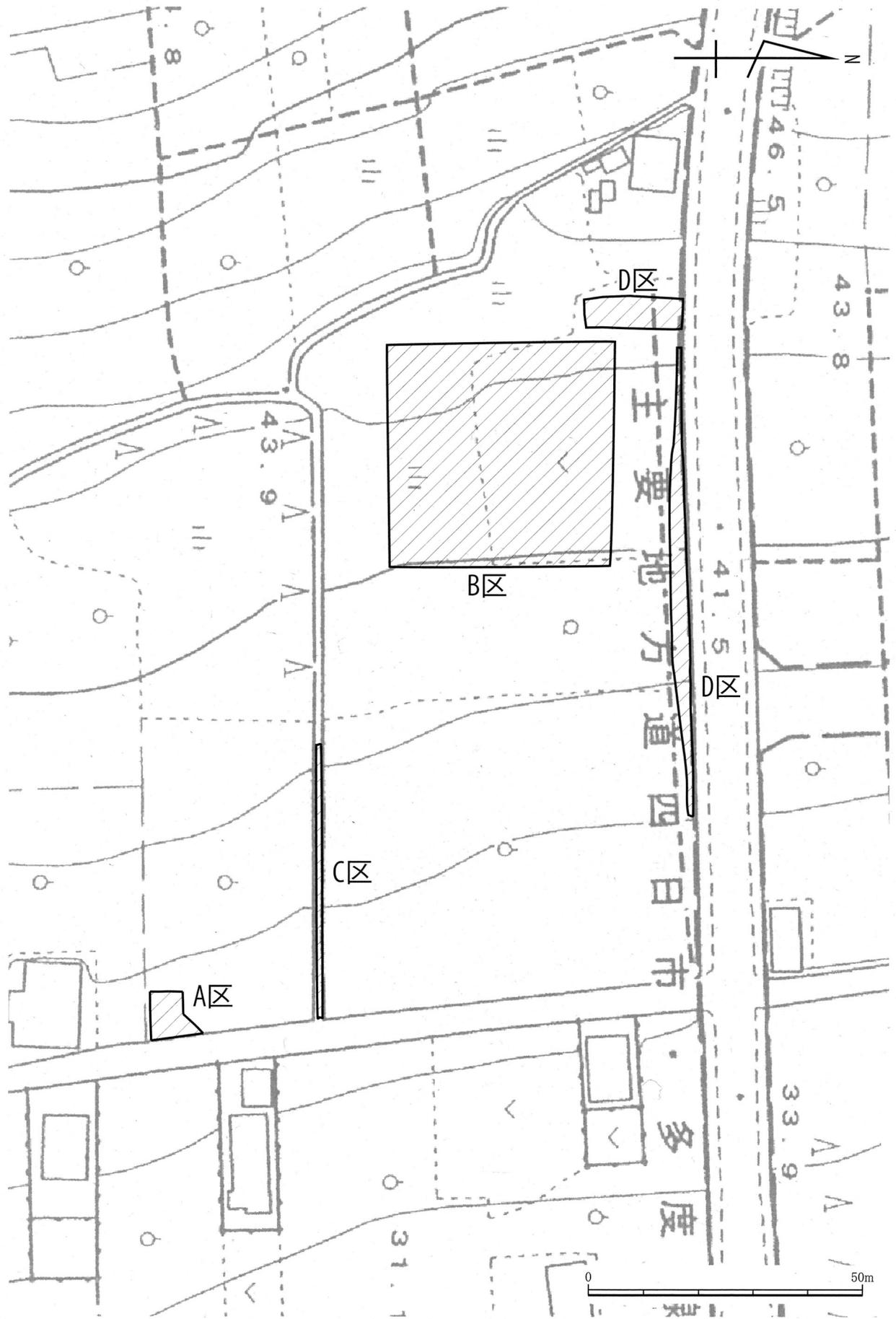


- 1天王平遺跡 2 袖井遺跡 3一ノ谷A遺跡（一ノ谷経塚・中近世墓群含む） 4一ノ谷B遺跡（3・4内に一ノ谷古墳群）
 5一ノ谷C遺跡（横山古墳群含む） 6 関東遺跡 7 宇賀神社古墳群 8 長尾遺跡 9 長尾古墳群 10 宇賀A遺跡 11 宇賀B遺跡 12 宇賀C遺跡 13 袖井遺跡 14 愛宕中世古墳群 15 西城古墳 16 多度経塚 17 多度神宮寺 18 多度A遺跡 19 多度B遺跡 20 柿宜谷中世墓群 21 猫ヶ谷遺跡 22 朝拝下遺跡 23 宮地中世墓群 24 八壺口遺跡 25 八壺谷経塚 26 八壺谷古墳・古墓 27 西野遺跡 28 寺山遺跡 29 北猪飼A遺跡 30 北猪飼B遺跡 31 西之河原遺跡 32 西田面遺跡 33 猪飼城跡 34 砂田遺跡 35 大久保遺跡・古墳群 36 宮前遺跡 37 中ノ谷遺跡 38 南小山廃寺 39 西谷通遺跡 40 西谷通古墓 41 貝殻遺跡 42 小山城跡 43 東谷通遺跡 44 林崎遺跡 45 西天王平遺跡 46 北小山廃寺 47 尾津森遺跡 48 馬場遺跡 49 森下遺跡 50 藤塚遺跡 51 石坪遺跡 52 下野代遺跡 53 石原遺跡 54 星鳥遺跡

第1図 周辺遺跡図 (S=1/20,000)



第2図 調査区位置図1



第3図 調査区位置図2 (1/1,000)

第2章 調査結果について

第1節 調査区と層位

調査区は丘陵の中腹に位置するため、調査区は西から東にかけて傾斜している。調査以前は畑として利用されていた地域で、みかんや栗の木も栽培されていたために樹木の切り株が散在している状況であった。畑の耕作土を含めた表土が0.7 m程度堆積しており、埋土中には近・現代の遺物が少量ながら混ざっていた。明確な包含層は存在せず、黄褐色粘質土の地山となる。黄褐色粘質土層は平均0.5 m前後堆積しており、その下層にはこぶし大から人頭大の礫層となる。今回の調査区では、遺構検出面が礫層となる箇所は無かったが、この調査区より北側に位置する第3次調査では黄褐色土層の堆積が薄くなり、礫層で遺構を検出する場合がある。

第2節 遺構

【A区】

A区は過去の調査区の中では南端にあたり、天王平遺跡の集落範囲がどのように広がっているかが期待された（第4図）。今回の調査区は、現況ではみかん畑の一面で、調査区東端は道路建設に伴い攪乱されていた。

発掘調査は、重機を使用して表土を掘削した。表土は黒褐色の粘質土で円礫を若干含んでいた。表土の掘削深度は平均で0.6 mを測り、北西から南東にむかって傾斜する地形であった。明確な包含層は認められず、標高34.3m～34.7mで黄橙色土の地山から掘り込んだ遺構を検出した。検出した遺構は住居址3棟、土坑2基、ピット30基である。

SB01

SB01は、4.0 m×5.0 m以上の規模の方形の竪穴住居である。この竪穴住居の西側に異なる遺構が重複しており、2回の建て替えをおこなっている住居の可能性もある。竪穴住居の中央で不整形な土坑（SK02）を検出した。埋土からは礫とともに少量の須恵器や土師器が出土したが、被熱の痕跡などは確認できなかった。また、支柱穴も確認できなかった。床構造は、貼床の痕跡はなく、礫を多く含んだ地山を床面としていた。

遺物は須恵器の杯などが全体からまばらに出土した。出土した須恵器から、これらの住居址は奈良時代に埋没したと考えられる。

SK01

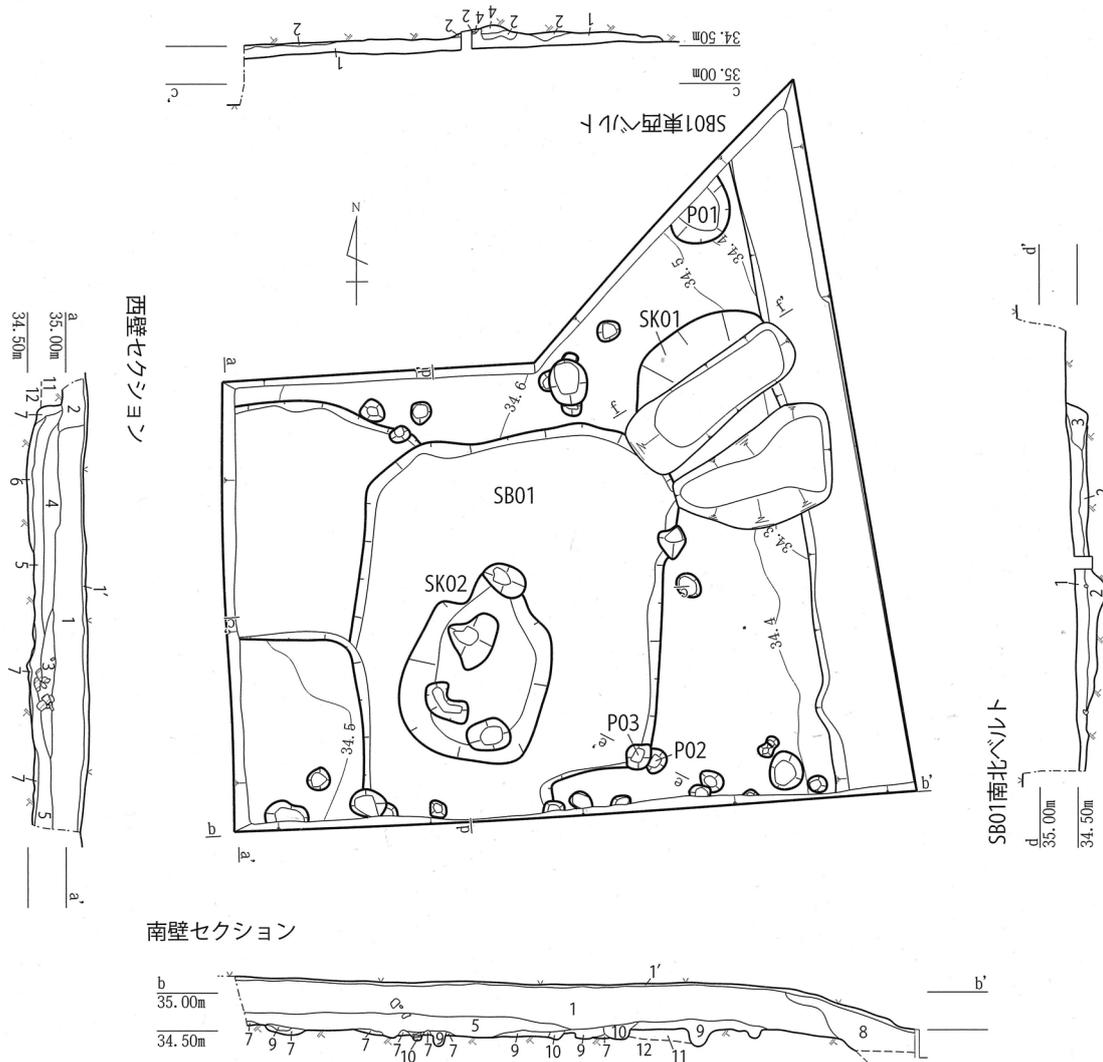
調査区北東で検出した土坑である。現代の攪乱坑に壊されているため全形は不明である。幅2.00 mを測り、残存する深さは0.40 mを測る。遺物は出土していない。

P01

調査区北東で検出した隅丸方形の掘方で、掘立柱建物の柱穴の一部と考えられる。幅0.91 m、深さ0.42 mを測る。調査区内に対応する柱穴が確認できなかったため、調査区北側に建物が配置されていると考えられる。遺物は出土していない。

P02・P03

SB01と重複しているピットである。P02、P03とも直径0.30 mで、深さはP02が0.10 m、P03が0.22 mを測る。互いに重複しており、P03が新しい。遺物は出土していない。（持田）



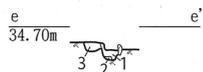
南・北壁セクション

- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1'. 暗灰褐色土 粘性 弱い しまり弱い 1. 暗灰褐色土 粗粒中量 礫中量 小砂量 炭中量 粘性 粘る しまりあり 2. 暗灰褐色土 粗粒中量 礫中量 小石微量 粘性 粘る しまりあり 3. 4よりやや明るい暗褐色土 礫～拳大石多量 (攪乱) 粘性 粘る しまりあり 4. 5よりやや暗い暗褐色土 2と同じ 粘性 粘る しまりあり 5. 暗褐色土 2と同じ 粘性 粘る しまりあり 6. 黄灰褐色土 粗粒中量 礫中量 小石 粘性 粘る しまりあり | <ol style="list-style-type: none"> 7. 黄褐色土 礫～拳大石多量(地山) 粘性 粘る しまりあり 8. 暗灰褐色土 礫～拳大石多量(ブロック埋設時の攪乱土) 粘性 粘る しまりあり 9. 黄灰褐色土 礫少量 小石少量 粘性 やや強い しまりあり 10. 暗褐色土 小石多量 粘性 粘る しまりあり 11. 黄褐色土 小石多量 粘性 弱い しまり強い (地山) 12. 黄褐色砂礫土 拳大の礫を多く含む (地山) <p style="text-align: center;">2, 4, 5は土質は同じ 色に微量な差</p> |
|---|---|

SB01ベルト

1. 暗褐色土 粗粒 礫中量 遺物含む 黄褐色粘質土中量 粘性 やや強 しまりあり
2. 黄褐色土 礫～拳大石大量 粘性 やや強 しまりややあり
3. 暗褐色土 黄褐色粘質土大量 粘性 やや強 しまりあり
4. 灰褐色土 礫中量 粗粒中量 遺物含む 粘性 やや強 しまりあり

P02, 03 セクション図



1. 黒褐色土 しまりよわい P03
2. 黄褐色土ブロック しまりややあり P03
3. 黒褐色土ブロック しまりやや弱い ブロック多く含む P02

SK01 セクション図



1. 褐色土 しまりやや強い 小径の礫多く含む
2. 灰黄褐色土 しまりややあり
3. 灰黄褐色土 しまりややあり
4. 黒色土(シルト質) しまりあり 黄色地山ブロック少量含む 須臾器あり



第4図 A区遺構実測図

【B区】

東西 40 m、南北 40 mの正方形の調査区である。地形は西から東にかけて傾斜し、東西の最大標高差は 3.1 mを測る。表土の深さは 0.5 mを測り、黄橙粘質土の地山で遺構を検出した。

掘立柱建物が 1 棟、土坑が 4 基、風倒木痕が 12 基、不明遺構多数を検出した。遺物は奈良時代から平安時代の土師器を中心に出土した。

SH01 (第8図)

調査区北東で検出した柱穴群 (P07～P13) で構成される掘立柱建物で、東西方向に 2 間、南北方向に 2 間以上に並んでいた。柱痕は検出できなかった。南北方向の柱穴間はほぼ 2 mの等間隔に検出したが、東西方向は西から 2.9 m、1.7 mと均等ではない。また、P07とP12は柱穴が重複しており、建替えを行っていた可能性が考えられる。この建物は調査区の北側に延長する可能性があるが、D区では範囲が狭く、これに伴う柱穴は確認できなかった。

SK03 (第9図)

調査区北西で検出した長方形土坑で、長辺 1.23 m、短辺 0.66 m、深さ 0.44 mを測る。埋土はしまりの強い灰層で、焼土が少量含まれる。埋土中からは 8 世紀代の土師器片が出土した。

SK04 (第9図)

調査区北西で検出した長方形土坑である。風倒木06と重複しており、SK04の方が後で掘削されている。長辺 0.84 m、短辺 0.53 m、深さ 0.6 mを測る。埋土はしまりの弱い黒色土で、8 世紀代の遺物が出土した。

SK05 (第9図)

調査区北で検出した長方形土坑である。長辺 1.07 m、短辺 0.99 m、深さ 0.27 mを測る。埋土はしまりの弱い黒色土である。

SK06 (第9図)

調査区北で検出した長方形土坑である。長辺 0.58 m、短辺 0.42 m、深さ 0.52 mを測る。埋土はしまりの弱い黒色土で、8 世紀の土師器甕が出土した。

風倒木 (第9図～第12図)

調査区全体で 12 基の風倒木痕を検出した。大きいもので直径 1.4 m、小さいもので直径 0.7 mを測る。深さは約 1 mで、形状はすり鉢形である。黒色土が上部中央にある地山と同じ黄橙色粘質土に覆いかぶさるように堆積している。風倒木6は、SK03に切られており、遺構の年代よりも古いと考えられる。

P04 (第12図)

調査区南東で検出したピットである。長辺 0.43 m、短辺 0.4 m、深さ 0.4 mを測る。埋土はしまりの弱い黒色土で、遺物は出土しなかった。

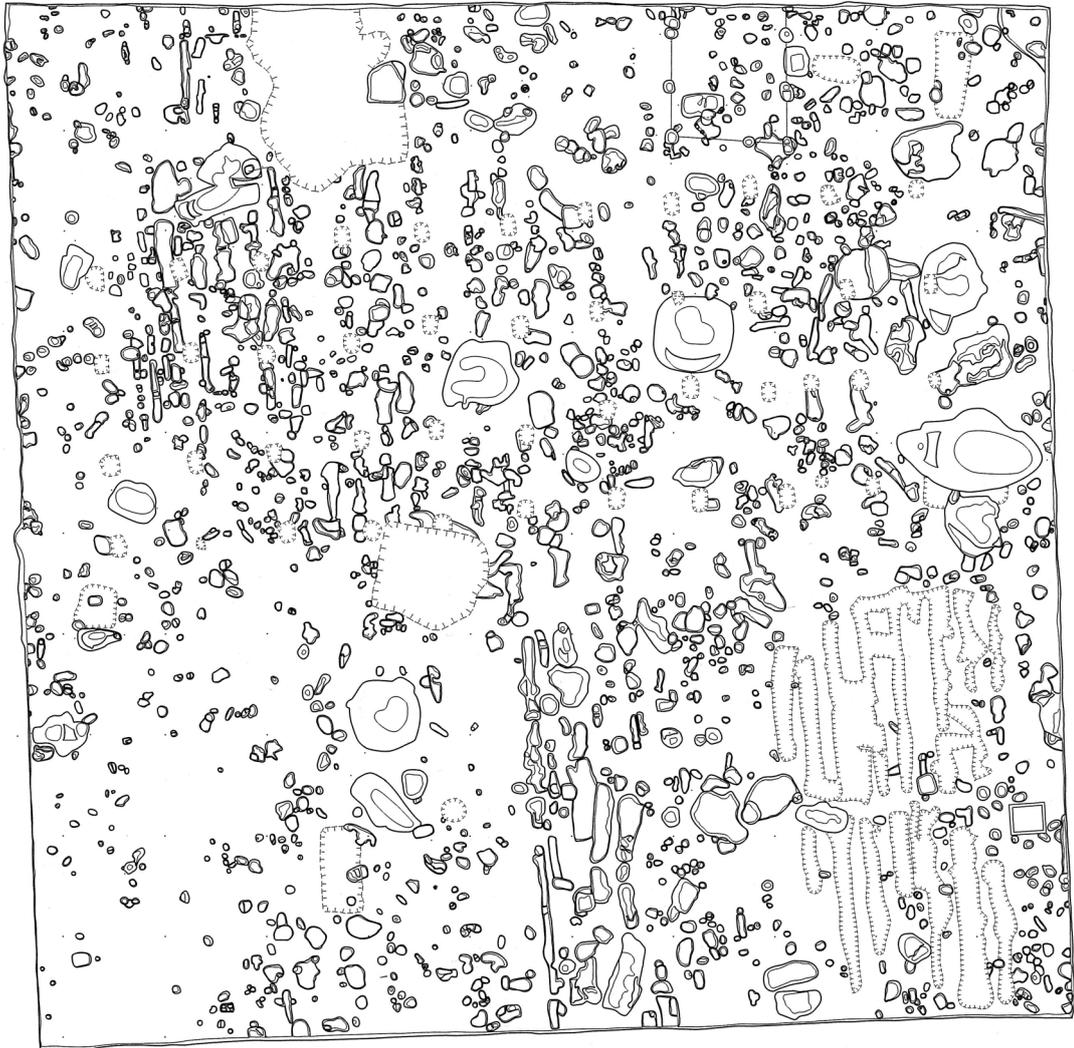
P05 (第12図)

調査区北で検出した、直径 0.3 m、深さ 0.2 mを測る。埋土はしまりの弱い黒褐色土で遺物は出土していない。一辺 0.25 mの扁平な石をピット底面で検出したため、礎石の可能性もあるが、組み合わせる遺構がないため、性格は判然としない。

P06 (第12図)

調査区北側で検出した。直径 0.32 m、深さ 0.29 mを測る。埋土はしまりの弱い黒色土で、貝殻が多く廃棄されていた。貝殻はヤマトシジミで、埋土の上部に集中して堆積していた。(持田)

B区



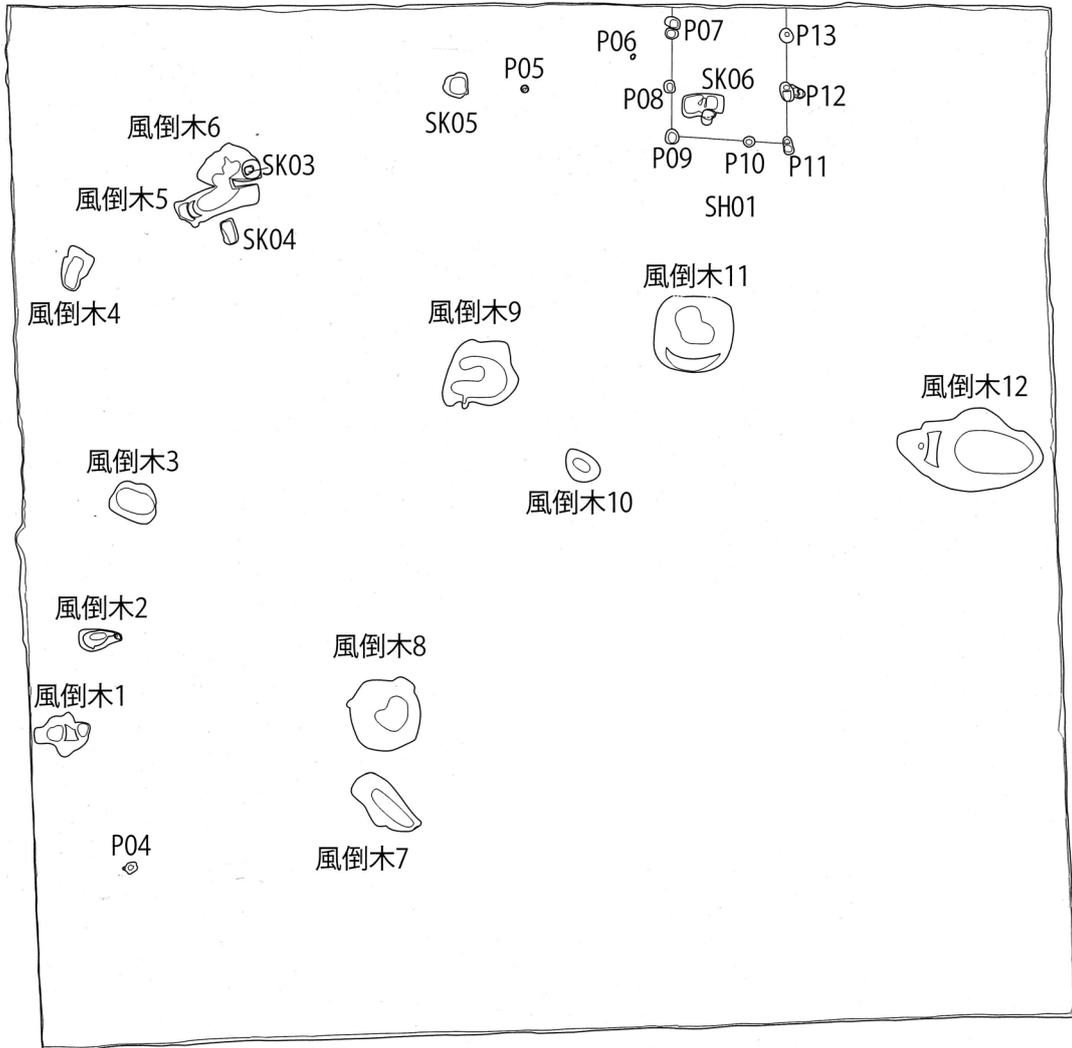
C区



0 (1/300) 10m

第5图 B区・C区調査区全体图

B区

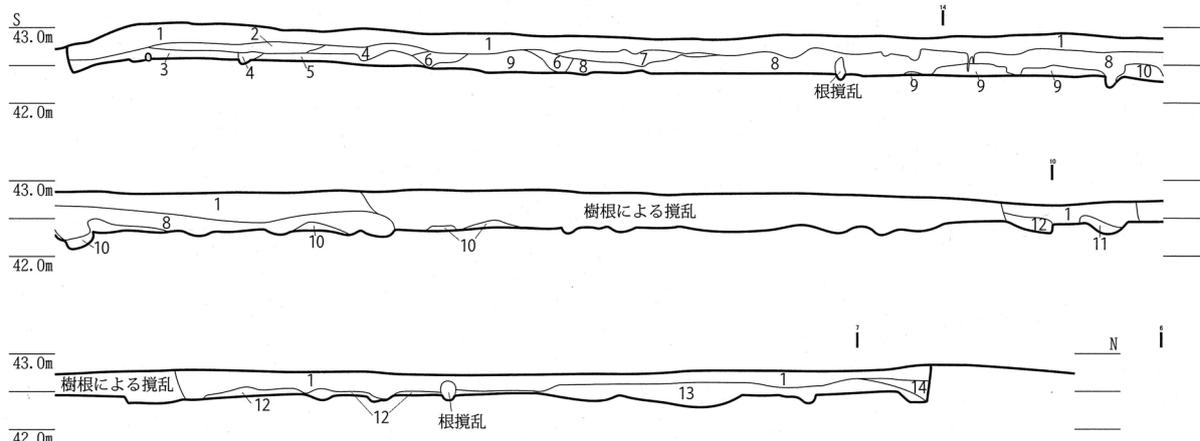


C区



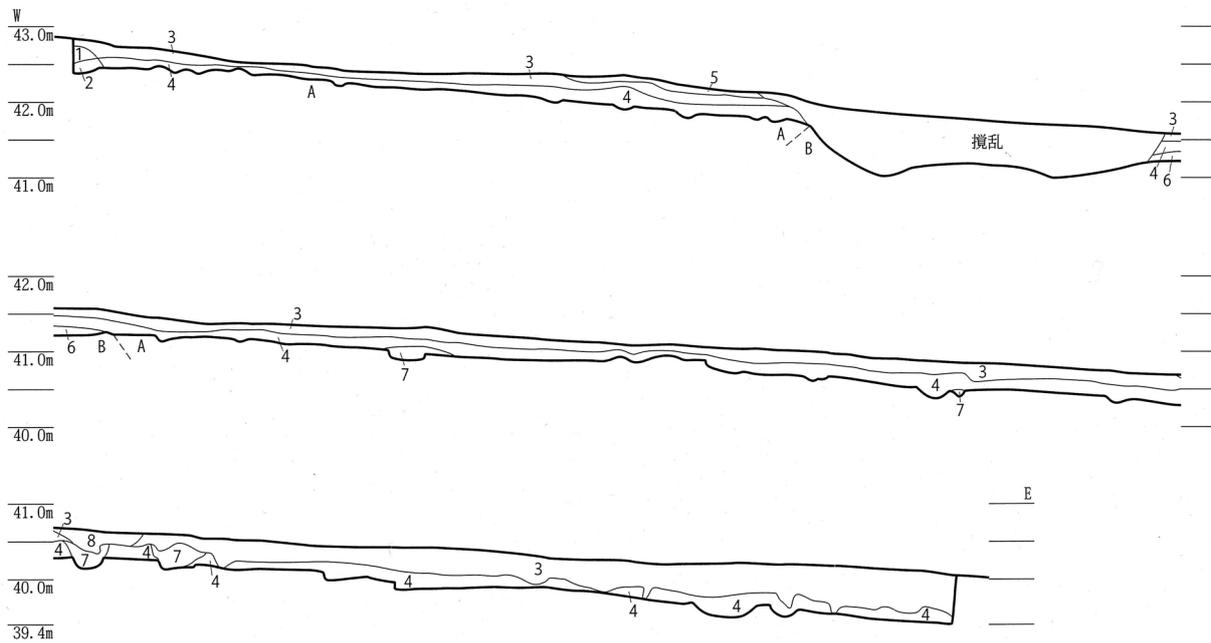
0 (1/300) 10m

第6图 B区·C区主要遺構図



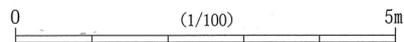
- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし ポロポロしている | 9. 10YR4/4 褐色土 しまりあり |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 1~5cm程の礫を多く含む | 10. 10YR4/4 褐色土 しまりあり 橙色土ブロックを含む |
| 3. 10YR4/4 褐色土 しまりあり 1~5cm程の礫を多く含む | 11. 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり 橙色土ブロックを若干含む |
| 4. 10YR2/1 黒色土 しまりややあり | 12. 10YR4/4 褐色土 しまりあり 暗褐色土ブロックを若干含む |
| 5. 10YR4/6 褐色土 しまりあり 1~3cm程の礫を若干含む | 13. 10YR3/2 黒褐色土 しまりあり 橙色土ブロックを含む |
| 6. 10YR2/1 黒色土 しまりあり 褐色土ブロックを若干含む | 14. 10YR3/2 黒褐色土 しまりなし ポロポロしている |
| 7. 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり | |
| 8. 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり | |
- 地山
7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘質

B区西壁

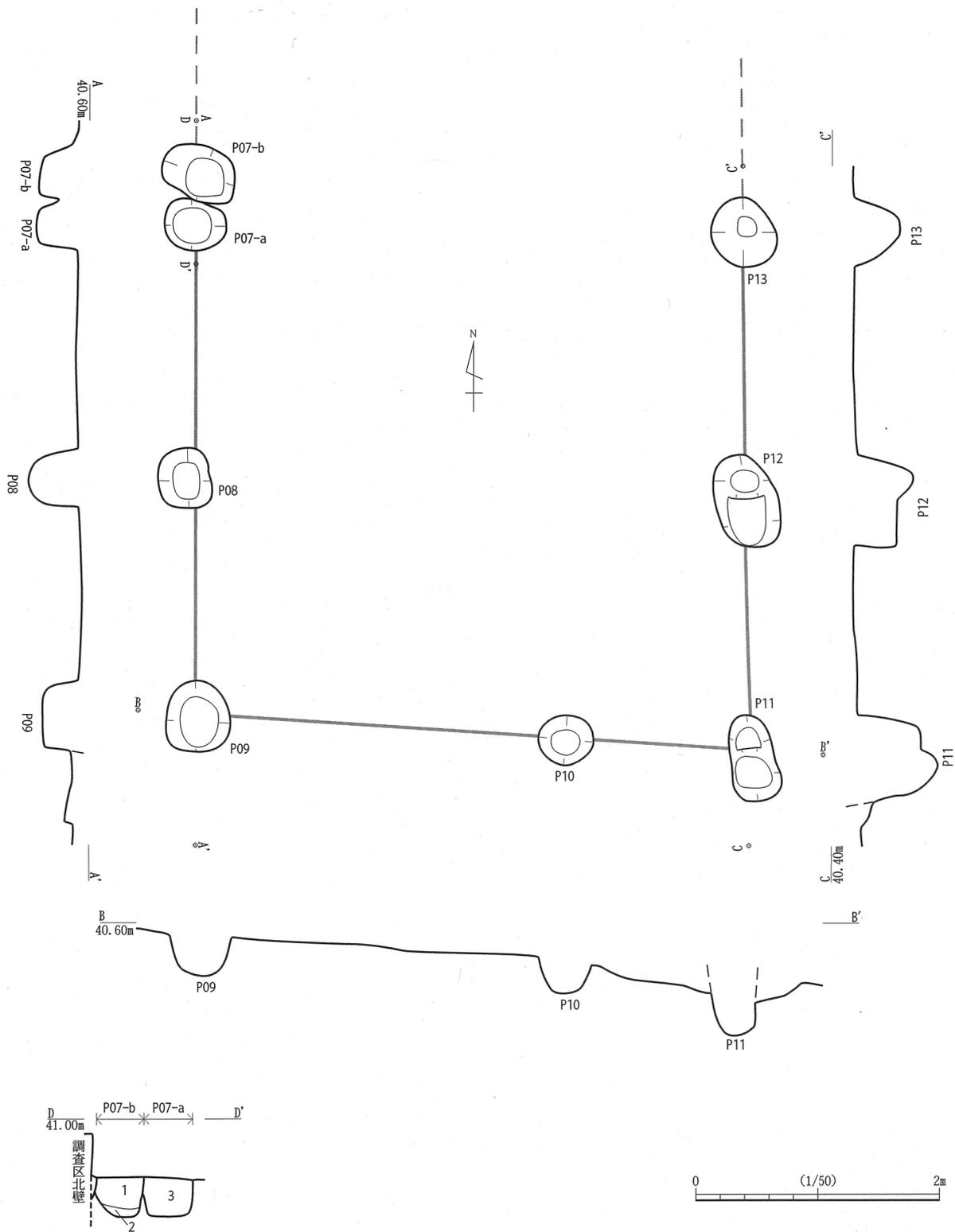


- | | |
|------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色土 しまりなし ポロポロしている | 7. 10YR2/1 黒色土 しまりややあり |
| 2. 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり | 8. 10YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 細かい褐色土を含む 根攪乱 |
| 3. 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし ポロポロしている | |
| 4. 10YR3/2 黒褐色土 しまりなし 橙色土ブロックを若干含む | 地山 |
| 5. 10YR4/6 褐色土 しまりあり 暗褐色土ブロックを多く含む | A. 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘質 |
| 6. 10YR3/2 黒褐色土 しまりなし 橙色土ブロックを多く含む | B. 10YR5/6 黄褐色土 しまりあり 粘質 礫を多く含む |

B区北壁

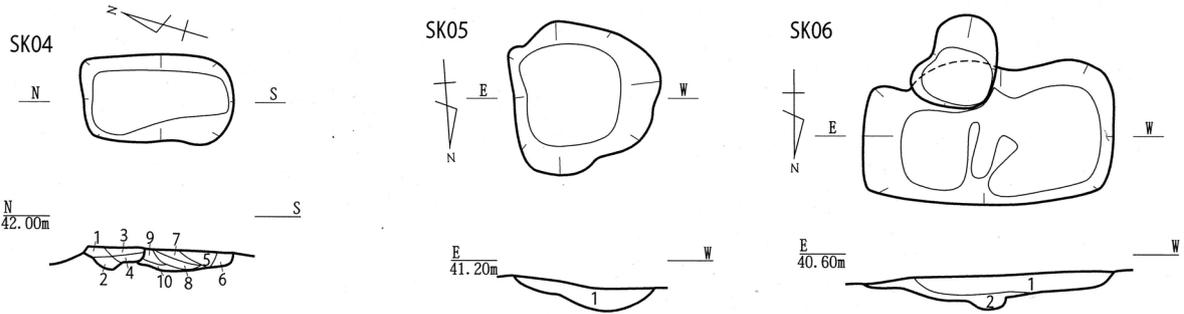


第7図 B区壁面実測図



1. 10YR3/2 黒褐色土 橙色土ブロックを含む しまりややあり
2. 10YR3/2 黒褐色土 橙色土ブロックを多く含む しまりよわい
3. 10YR3/2 黒褐色土 橙色土ブロックを若干含む しまりややあり

第8図 SH01 実測図



SK04

1. 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし もろい
2. 7.5YR2/2 黒褐色土 しまりややあり
3. 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 細かい根を含む
4. 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 淡黄色土・褐色土の1cm大程のブロックを若干含む
5. 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 細かい根を含む
6. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 橙色土ブロックを含む
7. 10YR6/4 にぶい黄橙色土 しまりなし 礫を少量含む
8. 5YR5/4 にぶい赤褐色土 しまりややあり
9. 2.5Y8/3 淡黄色土 しまりあり 黄橙色ブロックを含む
10. 5YR3/2 暗赤褐色土 しまりややあり 礫を少量含む

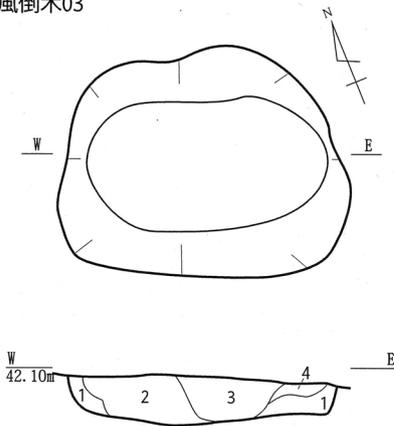
SK05

1. 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 赤褐色のブロックを含む

SK06

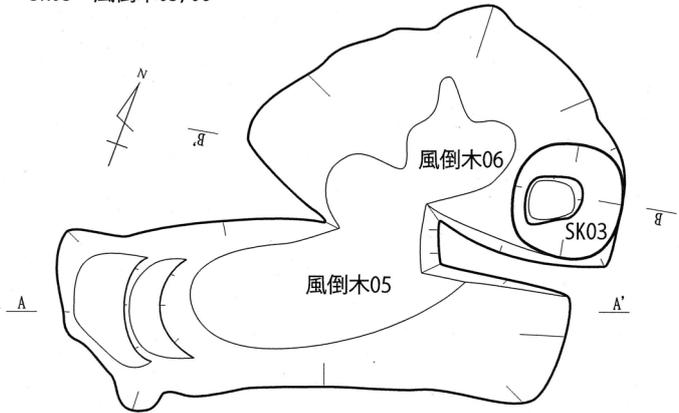
1. 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり 橙色土ブロックを若干含む
2. 10YR4/4 褐色土 しまりあり

風倒木03

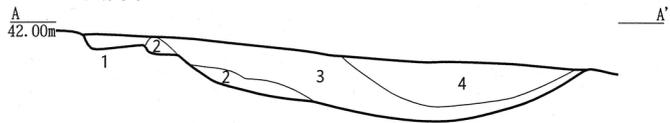


1. 10YR6/6 明黄褐色土 しまりなし
2. 10YR3/1 黒褐色土 橙色土を若干含む しまりなし
3. 10YR2/1 黒色土 しまりなし
4. 7.5YR4/1 褐灰色土 しまりややあり

SK03・風倒木05, 06

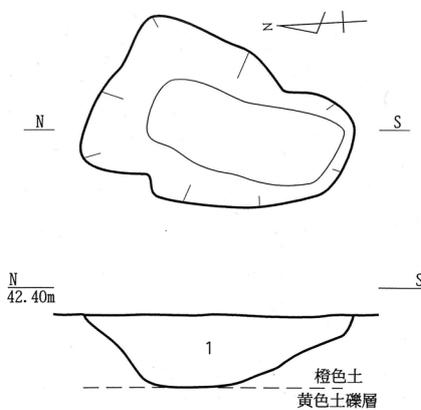


風倒木05

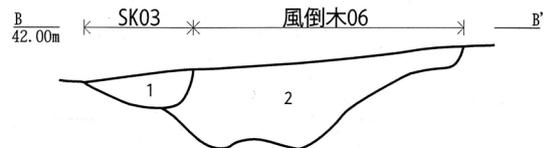


1. 10YR2/3 黒褐色土 しまりよわい 橙色土ブロックを若干含む
2. 10YR3/2 黒褐色土 しまりよわい 橙色土混じる
3. 10YR2/1 黒色土 しまりよわい 橙色土ブロック若干含む
4. 10YR7/6 明黄褐色土 しまりよわい 1~10cm大の礫を含む

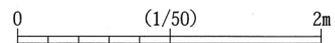
風倒木04



1. 10YR2/1 黒色土 しまりよわい 橙色土ブロック若干含む 風倒木か くさい

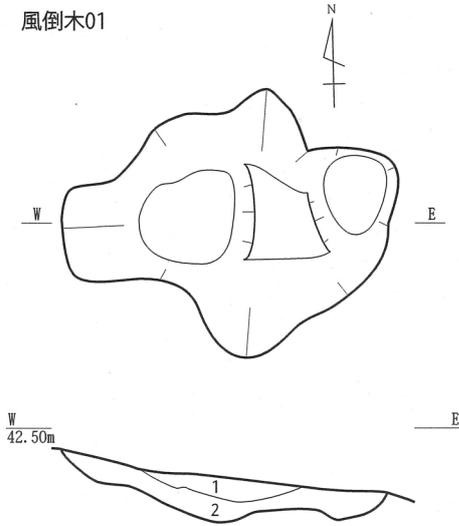


1. 10YR4/6 褐色土 しまりよわい 2cm大程の橙色土ブロックを若干含む
2. 10YR1.7/1 黒色土 しまりよわい 橙色土ブロックを若干含む



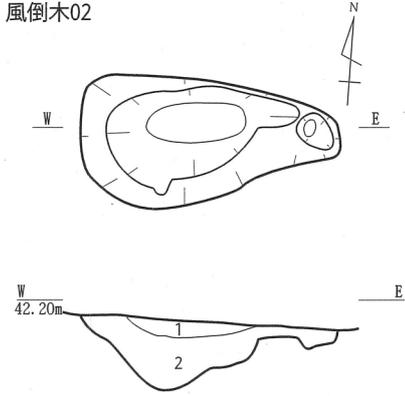
第9図 SK03-06、風倒木 03-06 実測図

風倒木01



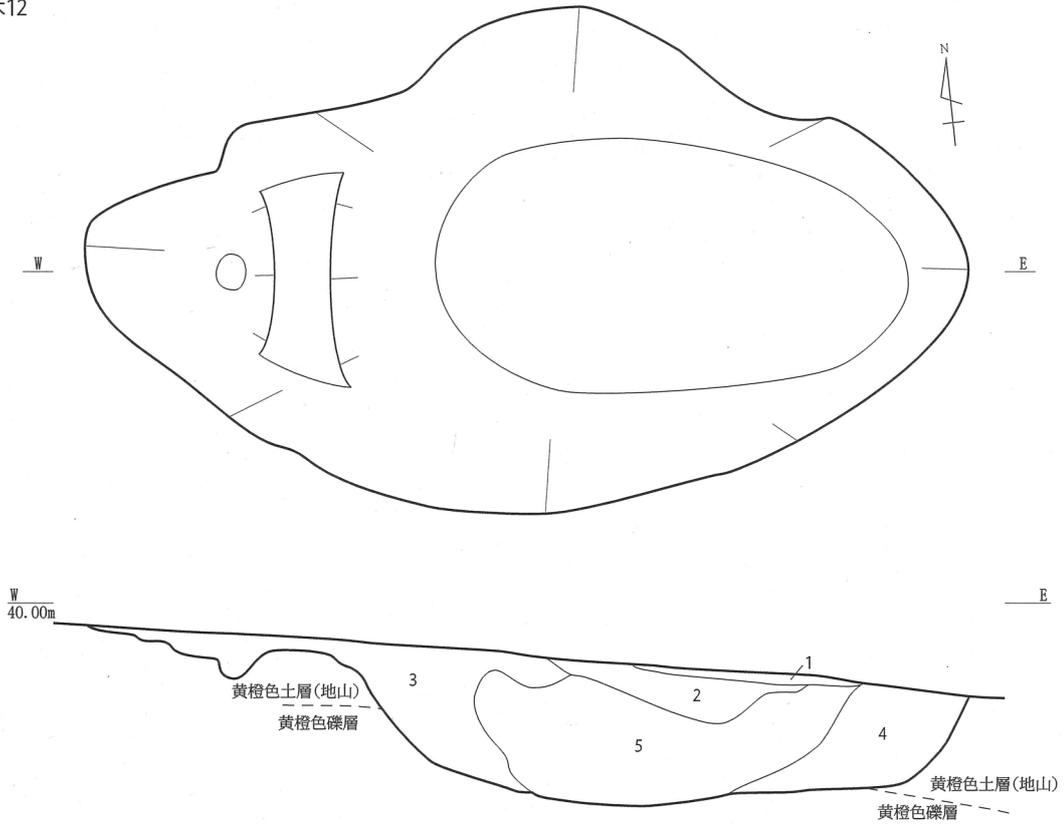
1. 10YR3/1 黒褐色土 しまりややあり
2. 5YR2/1 黒褐色土 橙色土ブロックを若干含む しまりあり

風倒木02



1. 10YR3/3 黒褐色土 しまりややあり
2. 5YR2/1 黒褐色土

風倒木12

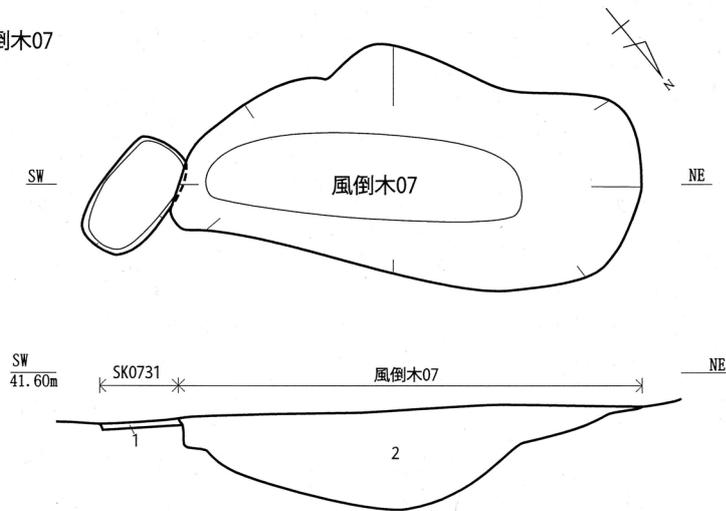


1. 10YR2/5 黄橙色礫 しまりあり ϕ 5~10cmの礫層
2. 10YR3/2 黒褐色シルト質土 しまりあり 黄橙色ブロックを若干含む
3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土 しまりあり 炭を若干含む
4. 10YR2/1 黒色シルト質土 しまりあり 黄橙色土ブロックを若干含む
5. 10YR7/6 黄橙色土 しまりつよい ϕ 5~15cmの礫を少量含む 地山土と同質

0 (1/50) 2m

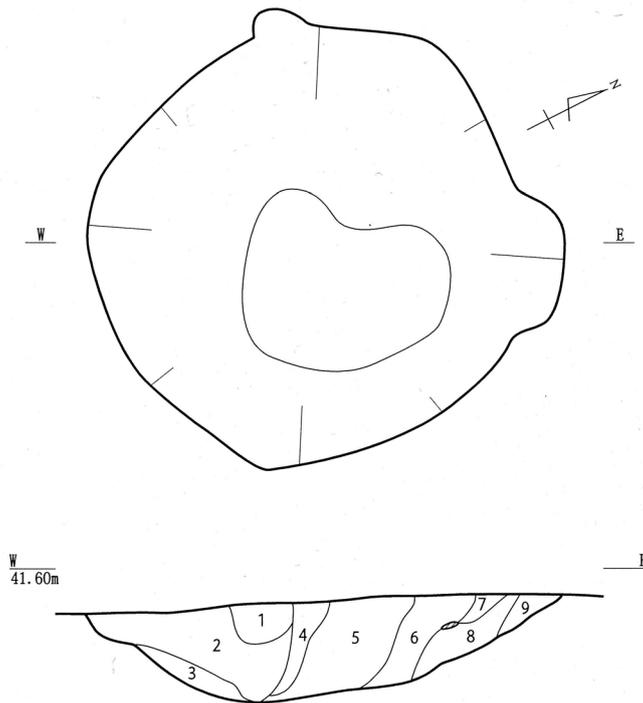
第 10 図 風倒木 01、02、12 実測図

風倒木07

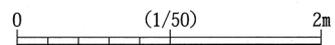


1. 10YR2/3 黒褐色土 しまりあり
2. 10YR3/4 暗褐色土 しまりあり 橙色土ブロックを若干含む

風倒木08

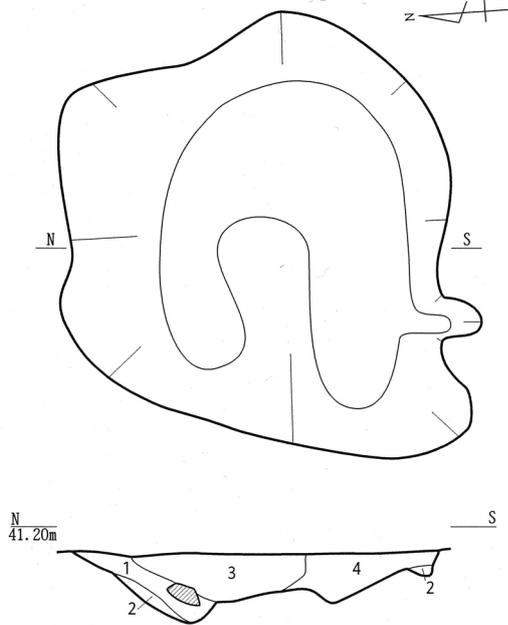


1. 10YR2/1 黒色土 しまりなし
2. 10YR3/1 黒褐色土 しまりなし
3. 10YR2/1 黒色土 しまりややあり
4. 10YR3/2 黒褐色土 しまりややあり
5. 7.5YR5/3 褐色土 しまりややあり
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 ややしまりあり 1~5cm大の礫を含む
7. 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 5~10cm大の礫を含む
8. 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 下から20cm程まで1~5cm大の礫を含む
9. 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 褐色土が混ざる



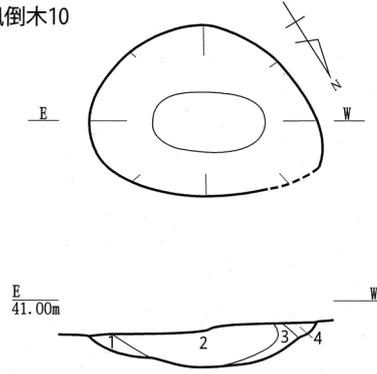
第11図 風倒木07、08実測図

風倒木09



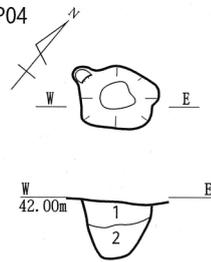
1. 10YR2/1 黒色土 しまりややあり
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 朽ちた樹根を若干含む
3. 10YR4/6 褐色土 しまりなし
4. 10YR2/1 黒色土 しまりややあり 朽ちた樹根を若干含む 1と同質

風倒木10



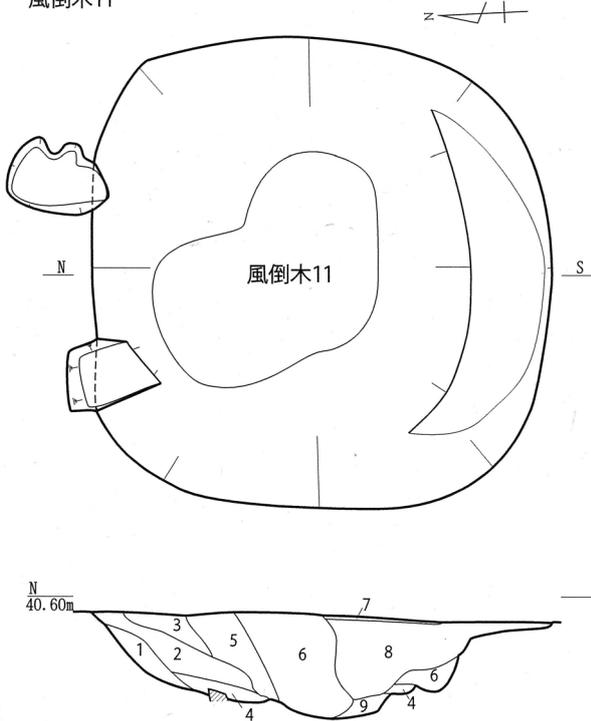
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりあり
2. 10YR2/1 黒色土 しまりややあり
3. 10YR4/4 褐色土 しまりあり 1~2cm大の礫を若干含む 地山土と同質
4. 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり

P04



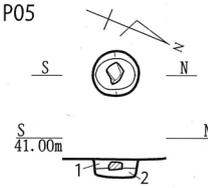
1. 10YR3/1 黒褐色土 しまりややあり 1cm程の橙色土ブロックを若干含む
2. 10YR3/1 黒褐色土 しまりなし ポロポロしている

風倒木11



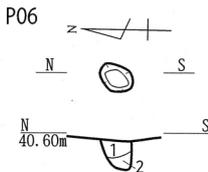
1. 10YR4/6 黄褐色土 しまりややあり
2. 10YR2/1 黒色土 シルト質土 しまりややあり 橙色ブロック・礫を若干含む
3. 10YR3/2 黒褐色土 しまりややあり
4. 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり
5. 7.5YR5/3 にぶい褐色土 しまりあり 1~5cm大の礫を含む 地山土と同質
6. 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 地山土と同質
7. 10YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 橙色ブロックを多量に含む
8. 10YR2/1 黒色土 シルト質土 しまりややあり
9. 7.5YR3/3 暗褐色土 しまりややあり

P05



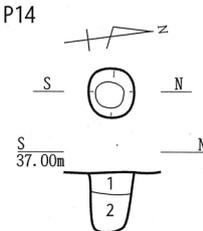
1. 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり 橙色土ブロックを含む
2. 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり 橙色土ブロックを含まない

P06

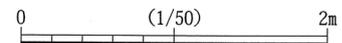


1. 10YR2/2 黒褐色土 しまりなし 二枚貝を含む
2. 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり 二枚貝を含まない

P14



1. 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり
2. 10YR3/4 暗褐色土 しまりあり 褐色土ブロックを若干含む



第12図 風倒木09-11、P04-06・14実測図

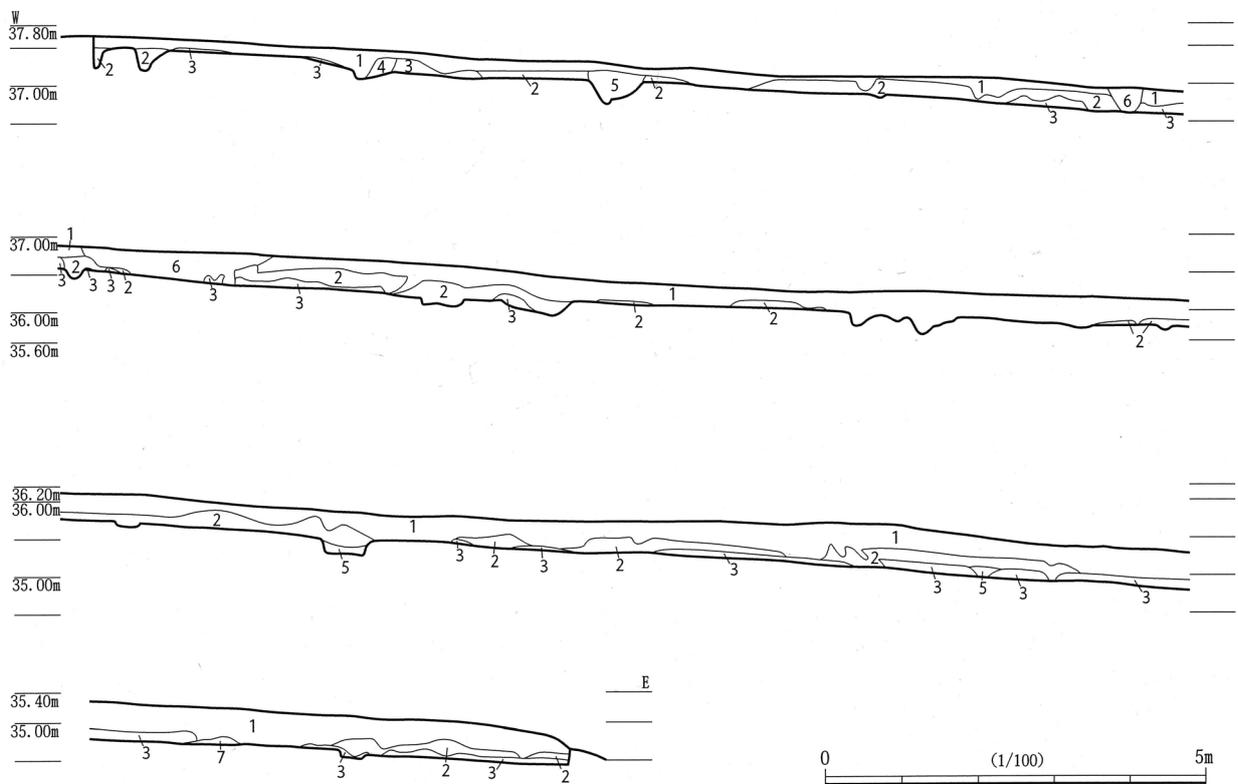
【C区】

C区はA区とB区の間に位置する、1 m×50 mの調査区である（第5図）。地形は西から東にかけて傾斜しており、調査区の西端と東端の標高差は3.1 mである。

検出した遺構は、ピット1基である。ほかに検出した遺構は明確な遺構といえるものがなく、攪乱の可能性が高い。遺物は出土していない。

P14（第12図）

調査区西で検出したピットで、直径0.30 m、深さ0.25 mを測る。掘立柱建物の柱穴の可能性はある。埋土は暗褐色土である。遺物は出土していない。（持田）



1. 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし ポロポロしている 樹根多い
2. 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり
3. 10YR4/6 褐色土 しまりあり 橙色土ブロックを含む
4. 10YR4/6 褐色土 しまりなし ポロポロしている
5. 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり
6. 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 10cm程の礫を多く含む
7. 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり

第13図 C区北壁実測図

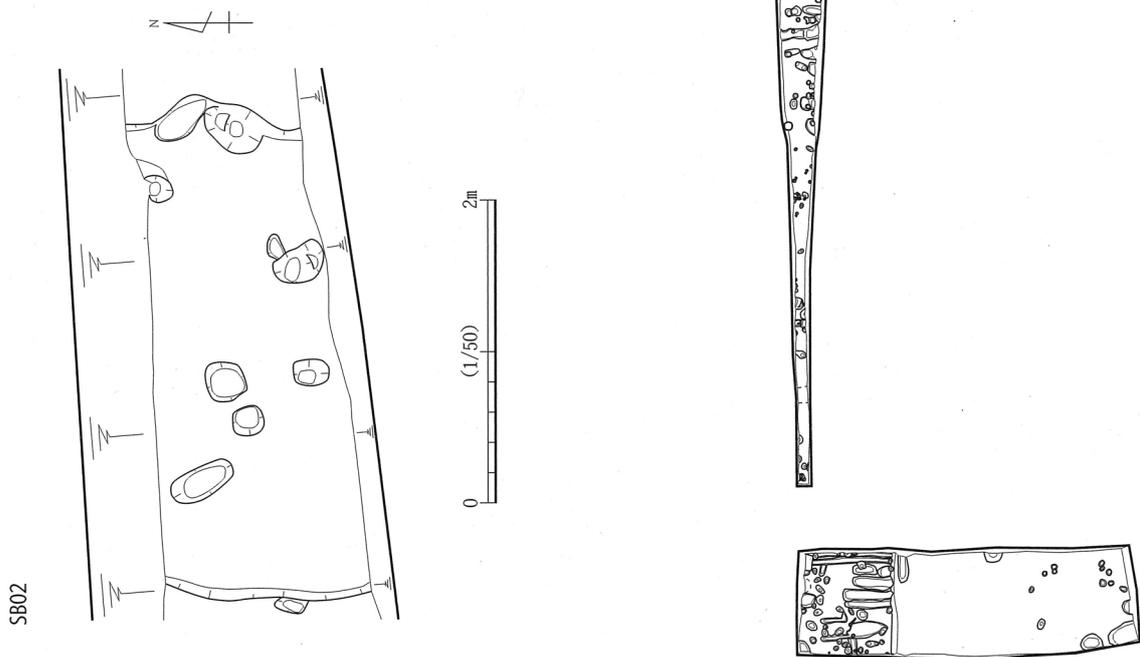
【D区】

D区は、1次調査の調査区の南側に位置する調査区で、B区北西部と道路側の2ヶ所がある(第14図)。北西部は5m×18mの調査区で北側5mの部分のみ遺構面が残存しており、残りは攪乱により消滅していた。道路側の調査区は、長さ86m、最大幅4mである。調査の制約上2回に分けて調査をした。調査区は他の調査区と同様西から東にかけて傾斜しており、西端と東端の標高差は4.2mである。

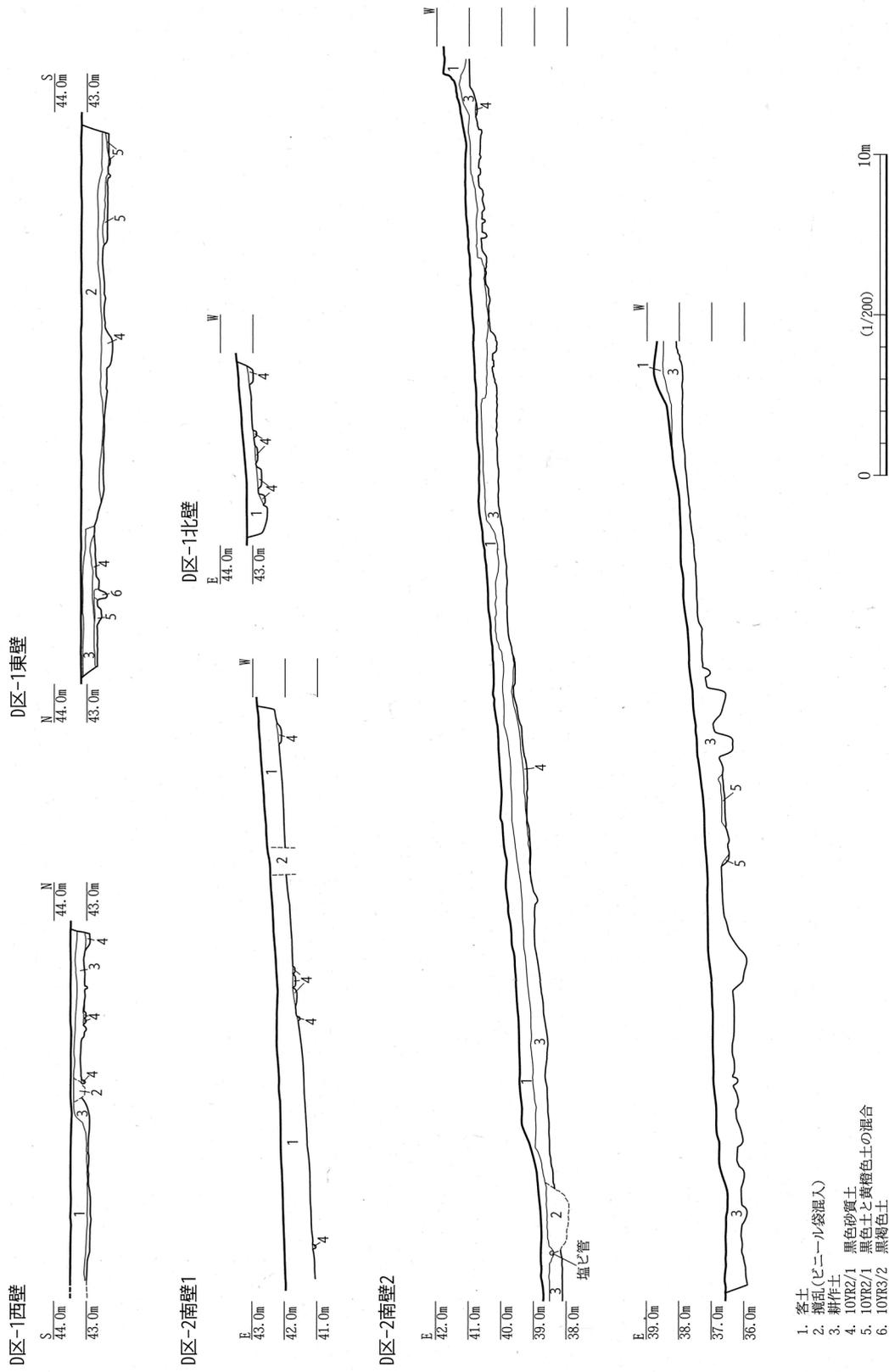
D区は住居址1棟、ピット1基を確認した。検出した遺構のほとんどは攪乱坑と考えられる。

SB02 (第14図)

道路側調査区の東側で検出した竪穴住居である。調査区の南北に延びており、残存部分で東西2.9m、深さ0.24mを測る。埋土は、黒色土と黄橙色土の混土で、土師器の破片が8点出土している。埋土掘削後の床面からはピットを5基検出し、これらは柱穴の可能性もある。なお、この住居址は、1次調査で住居址が重なって検出した箇所(第1次調査SB14・15)に隣接しているため、同様の時期に機能していたものと思われる。(持田)



第14図 D区全体図・SB02実測図



第15図 D区壁面東測図

第3節 遺物

今回調査で出土した遺物は、A区からD区まででコンテナ4箱を数える。出土した遺物は須恵器や土師器で奈良時代と平安時代の遺物が中心である（第15図）。

【A区】

SB01

1～5は土師器である。1～4は甕で、外面を縦方向にハケ調整し、内面は横方向のハケ調整を行っている。1は口縁が外反し、端部が丸く収まる。5は皿である。6～9は須恵器である。6は須恵器の短頸壺の蓋である。天井が水平で口縁端部の突出が長い。7・8は杯身である。体部の立ち上がりが長い。9は長頸瓶の肩部である。1～5は斎宮Ⅰ期（8世紀後半）、7～9はNN-32号窯式（8世紀後半）と考えられる。

その他

10～12は表土層から出土した須恵器である。10は天井が低く口縁の突出が短い。11は体部が短い杯身である。12は長頸瓶の把手部分と考えられる。10～12はNN-32号窯式（8世紀後半）と考えられる。

【B区】

SK03

13・14は土師器の甕である。15は土師器の皿である。口縁を強い横ナデで成形している。13～15は斎宮編年Ⅱ期（9世紀代）と考えられる。

SK04

16～18は土師器の甕である。16は内外面にハケ調整が施される。17は土師器の甕である。18は土師器の甕である。16～18は8世紀と考えられる。

SK06

19は土師器の甕の底部である。濃尾型の甕と考えられ、平底で外面を粗いハケ目調整をしている。時期はおおよそ8世紀と考えられる。

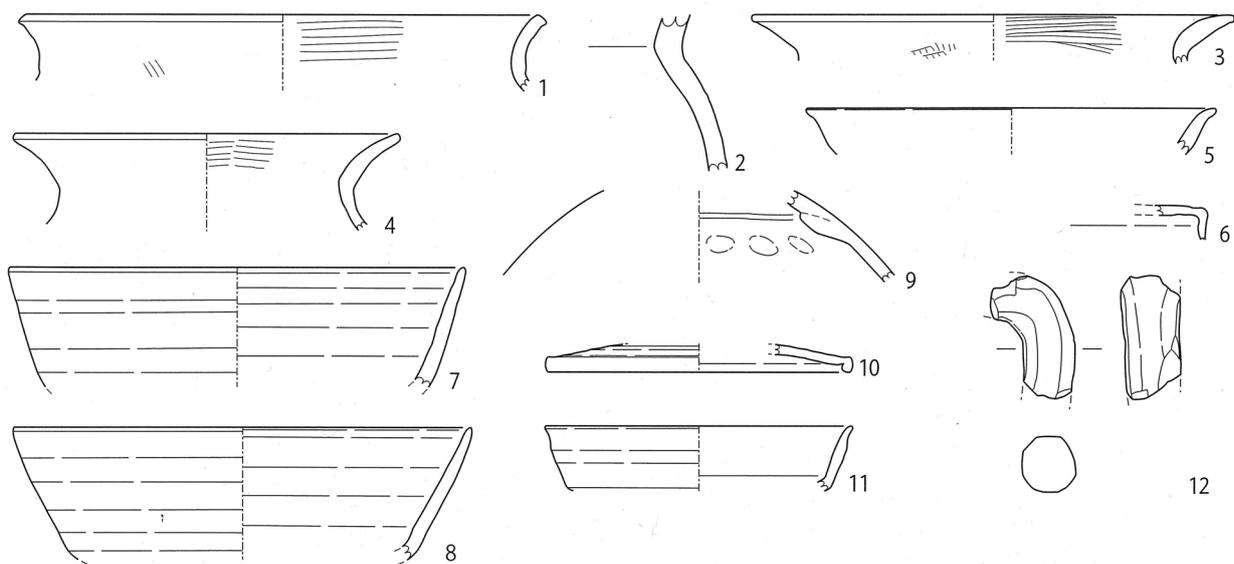
包含層

20～24は包含層出土の遺物である。20は土師器の杯である。21は杯である。22は長頸瓶である。口縁が水平に開く特徴からO-10号窯式（8世紀後半）と考えられる。23は土師器の胴部片である。24は陶器の播鉢である。すり目は11条で、近世後半と考えられる。

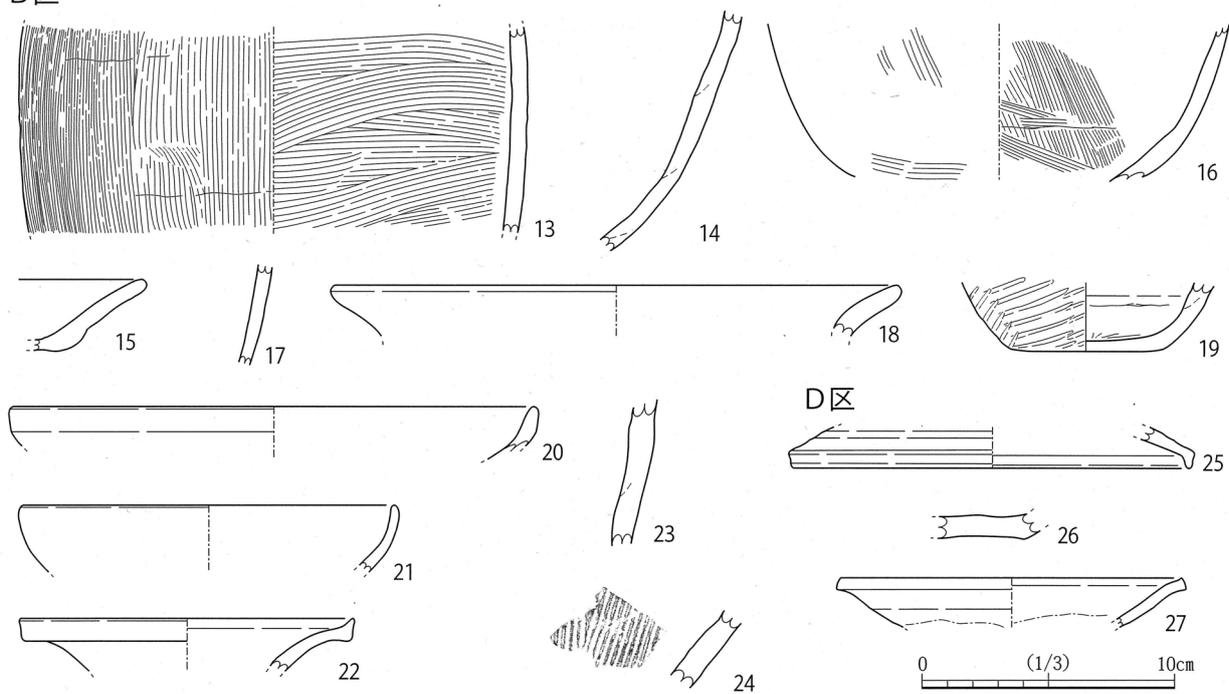
【D区】

25は須恵器の杯蓋である。NN-32号～O-10号窯式と考えられる。26は土師器の底部で、やや上げ底である。27は平碗である。江戸時代後半と考えられる。（持田）

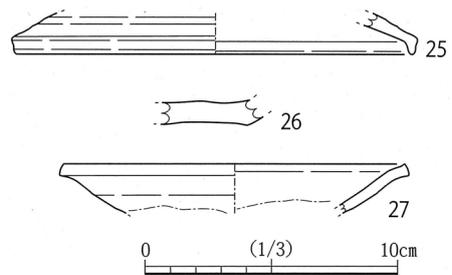
A区



B区



D区



第16图 出土遺物実測图

遺物観察表

遺物番号	種類	器種	口径	底径	器高	色調	粘土	焼成	残存率	調査区	遺構	特徴	時期
1	土師器	甕	20.0	-	-	にぶい黄橙色 7.5YR6/4	密	良好	1/12	A	SB01	口縁は外反する。 外面縦ハケ調整、内面横ハケ調整。	斎宮 I 期 (8世紀後半)
2	土師器	甕	-	-	-	浅黄橙色 10YR6/4	密	良好	破片	A	SB01	口縁は外反する。 外面縦ハケ調整、内面横ハケ調整。	斎宮 I 期 (8世紀後半)
3	土師器	甕	19.0	-	-	橙 色 5YR6/6	密	良好	1/12	A	SB01	口縁は外反する。 外面縦ハケ調整、内面横ハケ調整。	斎宮 I 期 (8世紀後半)
4	土師器	甕	15.0	-	-	にぶい黄橙色 7.5YR6/4	密	良好	1/12	A	SB01	口縁は外反する。 外面縦ハケ調整、内面横ハケ調整。	斎宮 I 期 (8世紀後半)
5	土師器	皿	16.0	-	-	にぶい黄橙色 7.5YR7/4	密	軟質	1/12	A	SB01	口縁端部を外方につまみ出す。	斎宮 I 期 (8世紀後半)
6	須恵器	短頸壺蓋	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR5/3	密	良好	破片	A	SB01	口縁部が下方に延びる。	NN-32・O-10窯式 (8世紀後半)
7	須恵器	杯身	18.0	-	-	灰白色 2.5Y7/1	密	良好	1/8	A	SB01	内湾ぎみに立ち上がる体部。	NN-32 (8世紀後半)
8	須恵器	杯身	18.0	-	-	黄灰色 2.5Y6/1	密	良好	1/8	A	SB01	内湾ぎみに立ち上がる体部。	NN-32・O-10窯式 (8世紀後半)
9	須恵器	長頸瓶	-	-	-	黄灰色 2.5Y6/1	密	良好	1/6	A	SB01	長頸壺の肩部。	NN-32 (8世紀後半)
10	須恵器	杯蓋	12.0	-	-	灰黄褐色 10YR6/2	密	良好	1/10	A	SB01	低い天井。 口縁端部がわずかに突出する。	NN-32 (8世紀後半)
11	須恵器	杯身	-	-	-	灰黄色 2.5Y6/1	密	良好	破片	A	表土	体部の立ち上がりが短い。	NN-32 (8世紀後半)
12	須恵器	長頸瓶	-	-	-	暗灰黄色 2.5Y5/2	密	良好	破片	A	表土	断面は面取り気味の円形。	NN-32 (8世紀後半)
13	土師器	甕	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	密	良好	1/4	B	SK03	口縁は外反する。 外面縦ハケ調整、内面横ハケ調整。	8世紀か
14	土師器	甕	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	密	良好	破片	B	SK03	外面は、ヘラ削り調整ののち ナデ調整。内面は磨滅。	斎宮 II 期 (9世紀前半)
15	土師器	皿	-	-	-	橙 色 5YR6/6	密	軟質	破片	B	SK03	口縁部を強く横ナデ調整。 体部に段をなし、底部は不調整。	斎宮 II 期 (9世紀前半)
16	土師器	甕	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	密	良好	1/6	B	SK04	口縁は外反する。 外面縦ハケ調整、内面横ハケ調整。	8世紀か
17	土師器	甕	-	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/3	密	良好	破片	B	SK04	口縁は外反する。 外面縦ハケ調整、内面横ハケ調整。	8世紀か
18	土師器	長胴甕	22.0	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	密	良好	1/8	B	SK04	ナデ調整。	斎宮 I 期 (8世紀後半)
19	土師器	甕	-	6.0	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	密	良好	1/2	B	SK05	平底。外面は、粗いハケ調整。	8世紀か
20	土師器	皿	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	密	良好	1/8	B	包含層	口縁が内湾して立ち上がる。	斎宮 II 期 (9世紀前半)
21	土師器	杯	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	密	良好	破片	B	包含層	内湾して立ち上がる口縁。	斎宮 I 期 (8世紀後半)
22	須恵器	長頸瓶	13.0	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	密	良好	1/6	B	包含層	口縁が水平方向に開く。	O-10窯式 (8世紀後半)
23	土師器	甕	-	-	-	橙 色 5YR6/6	密	軟質	破片	B	包含層	外面縦ハケ調整、内面横ハケ調整。	9世紀か
24	陶器	摺鉢	-	-	-	灰 色 5YR6/4	密	良好	破片	B	包含層	11条の摺目。	近世
25	須恵器	杯蓋	15.8	-	-	褐灰色 10YR5/1	密	良好	破片	D	SB02	口縁が短く突出。	NN-32・O-10窯式 (8世紀後半)
26	土師器	甕	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	密	良好	破片	D	包含層	平底。外面は、横ハケ調整。 内面はハケ調整。	8世紀か
27	陶器	平碗	13.0	-	-	灰白色 2.5Y7/1	密	良好	1/8	D	包含層	見込みが露胎。	近世

単位 = cm

第3章 まとめ

1. 天王平遺跡の調査成果

過去の天王平遺跡の調査と合わせ、今回の調査の成果を考察したい。過年度の調査成果をまとめると以下のように概観できる。

【天王平遺跡過年度調査成果概要】

1次調査

昭和56年6月2日～9月12日まで実施した。主要地方道四日市多度線改良工事に伴う発掘調査で、調査面積は約2900㎡である。調査対象地は天王平遺跡のほぼ中央を幅12m長さ240mで横切っている。調査区内で粗密はあるが、竪穴式住居17棟、掘立柱建物9棟を確認した。遺構の時期は、出土遺物から奈良時代末の9世紀後半である。

2次調査

昭和56年12月15日～昭和57年3月27日まで実施した。主要地方道四日市多度線改良工事に伴う発掘調査で、調査面積は約2700㎡である。調査対象地は、1次調査の延長部分である。1次調査同様、調査範囲内に粗密はあるが竪穴式住居34棟、掘立柱建物7棟のほか、土坑、溝を確認した。遺構の時期の中心も、1次調査と同様に9世紀後半から10世紀前半である。

3次調査

平成4年6月6日～7月3日・同年8月19日～9月10日まで実施した。天王平1号線道路改良工事に伴う発掘調査で、調査面積は533㎡である。調査対象地は、1次調査の中央部分から北に延びる町道の両側である。調査区内からは、竪穴式住居7棟、掘立柱建物3棟、溝などが確認された。時期の中心は、出土遺物から9世紀後半から10世紀前半である。

4次調査

平成9年6月16日～10月15日まで実施した。町道天王平多度駅線改良工事に伴う発掘調査で、調査面積は10244.5㎡である。調査対象地は、2次調査の調査区西端から北に延びる町道予定地である。調査区からは、竪穴式住居5棟、掘立柱建物1棟、溝7条、土坑墓1基のほか、土坑、ピットなどが確認された。時期の中心は、出土遺物から8世紀から9世紀、土坑墓は10世紀前半と考えられている。

5次調査

平成12年3月22日～3月28日まで実施した。町道小山線改良工事に伴う発掘調査で、調査面積は56.94㎡である。調査対象地は、町道小山線の西側部分である。調査区からは溝、ピットが確認された。出土遺物が些少のため、遺構の時期は不明だが、隣接する1次調査とほぼ同じ9世紀と考えられる。

6次調査

平成12年11月15日～平成13年1月4日まで実施した。町道多度駅線改良工事に伴う発掘調査で、調査面積は約250㎡である。調査対象地は、4次調査の延長部分である。調査区からは、溝、土坑、ピットが確認された。遺構の時期は、出土遺物から4世紀から6世紀と考えられる。

7次調査

平成18年9月25日～12月8日まで実施した。市道天王平5号線新設工事に伴う発掘調査で、調査面積は500㎡である。調査対象地は、3次調査が行われた町道小山線の東側部分で、1次調査と並行する。調査区からは竪穴住居が2棟、掘立柱建物が1棟、溝が5条のほか、土坑、ピットが確認された。竪穴住居から6世紀代の遺物が出土しており、周辺の調査と比べやや古い時期と考えられる。

2. 今回の調査と天王平遺跡について

B区で検出した2間×3間以上の掘立柱建物は、第1次調査で確認された遺構群と繋がりを示すものといえる。また、D区東側では8世紀代の竪穴住居と考えられる遺構を1棟検出していることも遺跡の広がりを示している。遺物が出土する区域も第1次調査区に近い、調査区北側に集中するところが多く、主な遺跡の広がり今回の調査区の北側にあたると思われる。風倒木痕よりも新しく重複する、8世紀代の遺物が出土した土坑（SK03）があるため、遺構より古いことが分かる。南東のA区でも竪穴住居が確認できたため、南東地域には北側と離れて居住域が点在したと考えられる。

以上の事柄を総合すると天王平遺跡は以下のように要約できる。

天王平遺跡は、東に向けて緩やかに下る広大な丘陵上に広がる、旧多度町下最大の複合集落遺跡である。今回の8次調査までの発掘調査総面積は約9000㎡を測る。確認された主な遺構は、竪穴住居67棟、掘立柱建物23棟で、ほかに1次調査では火葬墓（SX53）、4次調査では土坑墓（SX01）が確認されている。

集落の形態は、竪穴住居が2～3棟単位で点在する散在型集落で、これが、時代が下るに従って掘立柱建物を採用していったと考えられている（註1）。掘立柱建物は、多くが3間×2間の掘立柱建物であるが、中には1次調査で検出した5×4間の大型総柱建物（SB35）なども存在する（註2）。出土遺物から、これらの多くは奈良～平安時代（8世紀前半～10世紀前半）の建物と推定される。但し、7次調査では埋土から6世紀代の須恵器が出土した竪穴住居（SB02）が確認され（註3）、6次調査では4～6世紀の包含層遺物が多く出土する（註4）など、遺跡の北部にやや古い傾向が見られる。（松田）

註1 岡田登ほか 2002 『多度町史 資料編1 考古・古代・中世』多度町教育委員会

註2 久志本鉄也ほか 1982 『天王平遺跡発掘調査報告I』三重県教育委員会

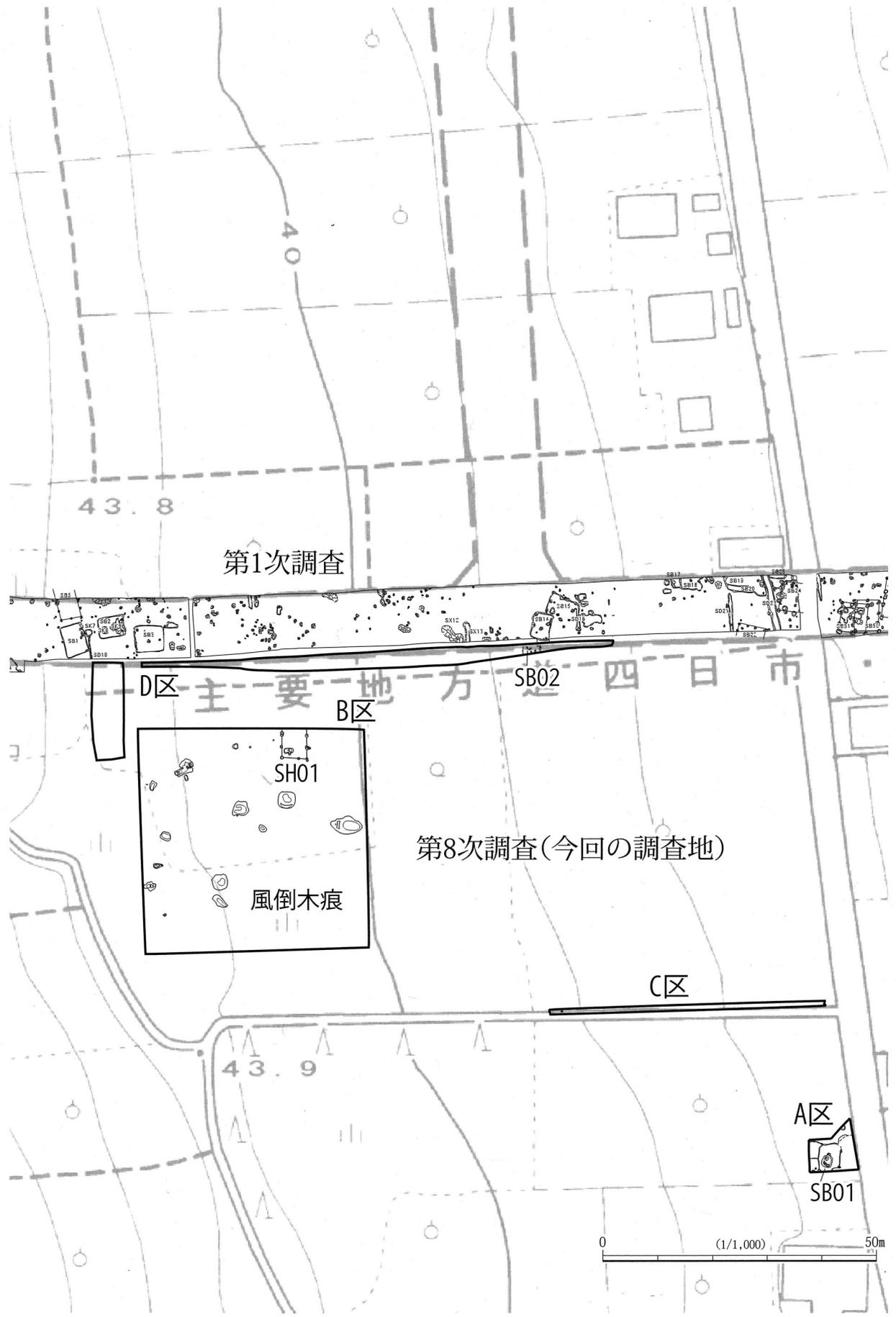
註3 石神教親 2007 『天王平遺跡発掘調査報告—第7次調査—』桑名市教育委員会

註4 石神教親ほか 2003 『天王平遺跡発掘調査報告—第4・5・6次調査—』多度町教育委員会

参考文献

泉 雄二 2000 『斎宮跡の土器様相』斎宮歴史博物館

榎崎彰一ほか 1983 『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』愛知県教育委員会



第17図 1次調査区と8次調査区

写 真 图 版



A区調査前風景（東から）



A区遺構検出状況（東から）

図版 2



A区 SB01 (西から)



A区 P01 (南から)



B区調査前風景（東から）



B区完掘状況（南西から）

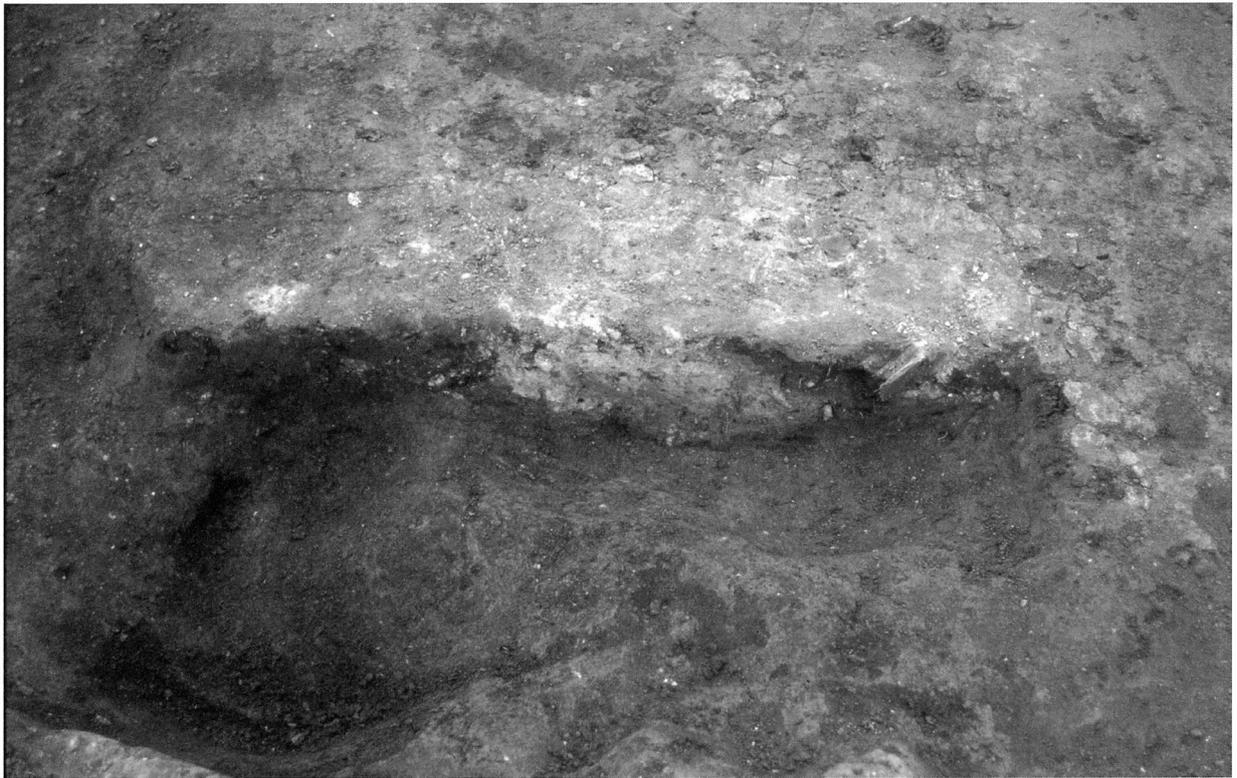
図版 4



B区 SH01 (北から)



B区 P06 (南から)



B区 SK03 (西から)



B区風倒木 09 (西から)

図版 6



C区調査前風景（西から）



C区完掘状況（西から）



D区西側調査前風景（南から）



D区西側完掘状況（南から）



D区西側調査前風景（西から）



D区西側完掘状況（東から）

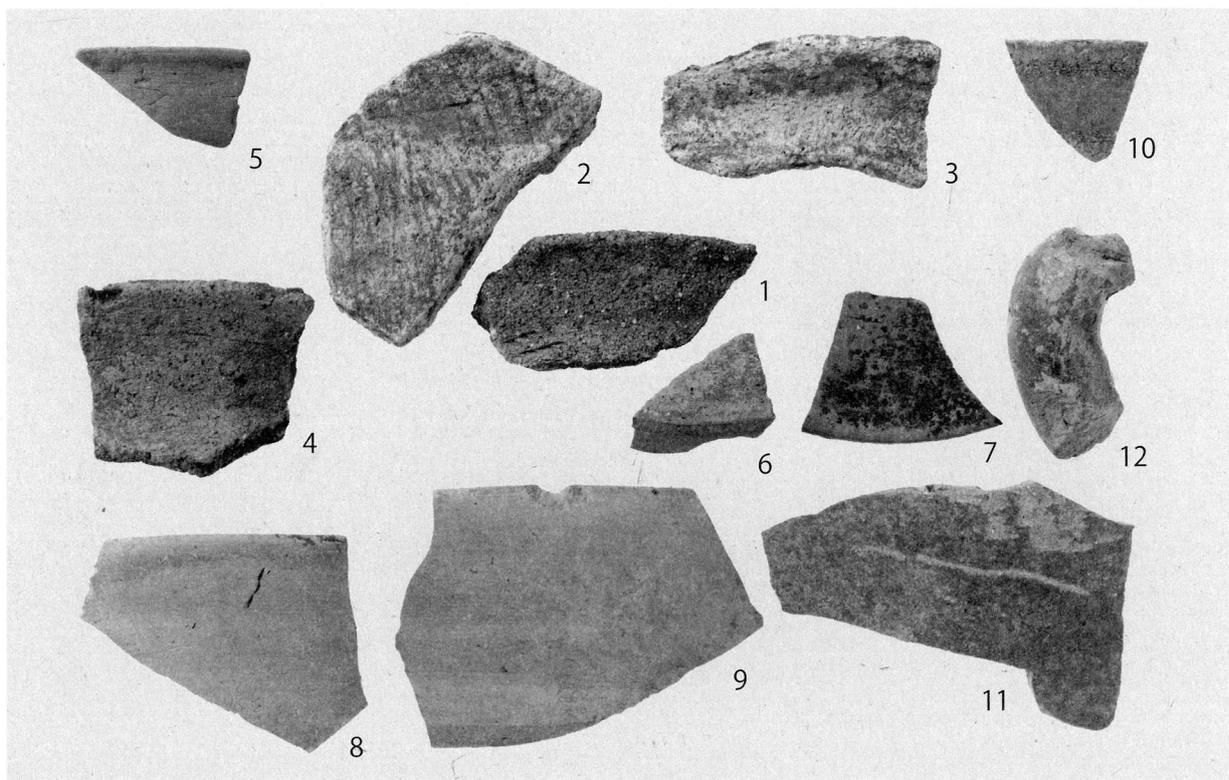


D区東側完掘状況（西から）

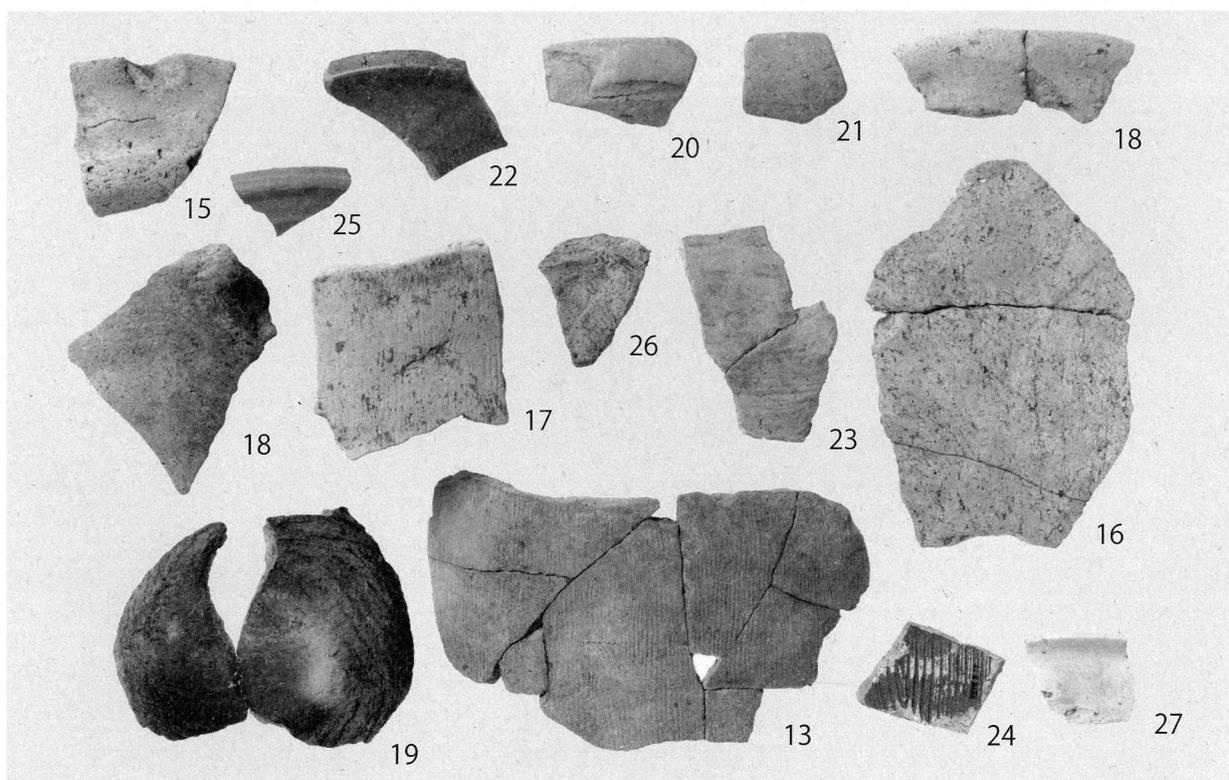


D区東側 SB02（北西から）

图版 10



A区出土遺物



B・D区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	けんこうぞうしんしせつけんせつにともなうてんのうびらいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	健康増進施設建設に伴う天王平遺跡発掘調査報告							
副題	—第8次調査—							
編集者	石神教親							
執筆者	石神教親・持田 透・松田 繁							
発行機関	桑名市教育委員会							
所在地	〒511-8601 三重県桑名市中央町2丁目37番地							
発行年月日	2010（平成22）年3月31日							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	遺跡番号	調査期間	単 位	北 緯	東 経	調査面積	調査原因
		市						
てんのうびらいせき 天王平遺跡	みえけんくわなしたどちょう 三重県桑名市多度町 おやまあざてんのうびら 小山字天王平	b57	2008/1/16 ～ 2009/11/6	度 分 秒	35 7 52	136 38 17	1975 m ²	健康増進施設建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
天王平遺跡	散布地	奈良時代 ～ 平安時代	掘立柱建物・土坑 溝・ピット	土師器 須恵器				

健康増進施設建設に伴う

天王平遺跡発掘調査報告 - 第8次調査 -

発 行 桑名市教育委員会
〒 511-8601 三重県桑名市中央町 2-37
編 集 株式会社イビソク 三重営業所
〒 511-0904 三重県桑名市野田 2丁目 7-49
印 刷 富士出版印刷
発 行 日 平成 22 年 3 月 31 日



この印刷物は古紙配合率100%再生紙と環境にやさしい植物性大豆インキを使用しています。